
名無し小説

チョコラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名無し小説

【Nコード】
N6826V

【作者名】
チヨコラン

【あらすじ】
フィリルプロフィール
身長 154.4cm
体重 41kg
バスト 76cm
ウエスト 50cm
ヒップ 73cm
好きな食べ物 未定
嫌いな食べ物 かぼちゃ、ナス

好きなスポーツ バスケットボール
好きな飲み物 ドクペ

正義 ただのバカ

ノーチエス 少林寺経験者

サトピオン サトピー財閥の息子

始まりは、明誠繚乱学校の始業式の前から始まっていた・・・

「フィリル、一緒に学校へ（蹴）」

この人は正義、私の実の兄だけど・・・私が大好きな変態

「バカにいかんと学校行ったら友達いなくなるよっ！」

私はフィリル、今日は大事な明誠繚乱学校の始業式遅刻なんてできない。

「そんなこと言ふなよフィリルー俺らは兄妹なんだぞ」

「兄妹だからいやなんだよ、バカにいかんてしらないっ」

「そうか、フィリルも子供じゃないんだもん、反抗期なんだろうきつと・・・」

正義はバカであつた中学での成績はほぼ最下位だつた

「もう兄貴ったら、頭おかしいんじゃないかな・・・」

「フィリル、よっ！今日も元気かー」

このお気楽な感じは美空である、美空は小学校からの友達で唯一の親友

「美空今日も元気だね」

「当たり前じゃないか、今日は月曜だぞ、週の始まりだぞ
また一週間がんばるぞーってならない？」

「なるのは美空だけじゃないかな？月曜日は誰でもだるい日だよ」

「そーなのかー、それより駅前にできたケーキ屋行かない？
けっこう評判いいらしいよ」

「自分の話が終わったら急に聞く耳持たないねw

まあ、今日は暇だしこっかケーキ屋」

「今日はじゃなくて今日もでしょ彼氏とか作れば
フィリル可愛いし」

「可愛くないよ、美空のほうがよっぽど美人だよ」

「そうかな？ やっぱフィリルはお人形みたいで可愛いよ」

「人形なんてやめてよw」

こんな他愛もない話をしながら学校についた

「ここが学校かぁ！ 新学校っていうくらいあってきれいだね」

「そだね！ ってあれ？ 後ろにいるのってフィリルの兄貴じゃないの？」

「美空？ 何言ってるの？ あれは不審者だよ目合わせないほうがいいよ」

「フィリル！ お兄ちゃんのこと嫌いになったの？」

「兄さん！ 齒くいしばりなさい！」

見事に上段回し蹴りが顔にクリーンヒットしていた

正義は身動きが取れずにそのまま保健室に運ばれたのは言うまでもない

「フィリル、やりすぎじゃない？」

「大丈夫よ兄貴なら生命力だけは高いから」

「フィリルは空手で黒帯なんだからね」

「それはそうだけど・・・」

その癖か業とかわからないがつい

兄貴を蹴る習性がついていたのであった

「ピンポンパンポン！ 全校生徒に告げる！」

今すぐ校庭に集合だ！

始業式は校庭でやる！ 以上だ！

ピンポンパンポン！

校長は歳は秘密らしいが相当な歳だろうが結構元気

「あゝあゝみなさんおはようございます」

「・・・」

「今日もいい天気ですね」

「校長！ 雨降ってます！」

「今日は悪い天気ですね。 ゴッホン、皆さん、始業式は楽しみでしたか？」

「・・・」

校長は喋りたがりあなので20分しゃべり倒してすっきりしたのか
トイレに駆け込んでしまった・・・

「えっと・・・これで始業式を終わります、礼！」

軽い感じの始業式は幕を閉じたのであった

「ねえ、美空あの校長変だよな」

「ええーおもしろかったよ、トイレに駆け込むときにズラ落とした
ところとか」

「美空はそれしか見てなかったでしょ」

「フィリルには一本取られたよ」

「美空に言われると照れるよ」

「照れ屋なフィリル可愛っ」

「もう美空くっ付かないでよ」

「あ！もう教室に集まらなくちゃ」

「美空は相変わらず切り替え早いんだから」

所で正義はどうなったかという・・・

まだ保健室で夢の中だった、小さな川を渡ろうとしていたのだった。

「ああー私が今日から担任の下村 零羅だ

だるいから私の自己紹介は終わりにしてそろそろお前らの自己紹
介に

進めようか」

「私はフィリルです、これから一年よろしく願いします」

「私は鎚木美空です、よろしくちゃん」

「俺はサトピオンだ、一年よろしく頼むぞ」

「俺はノーチエスだ、一年間よろしく」

「俺はフィリルの兄正義だ、フィリルに悪い虫がつかないようにが
んばるからな

フィリル」

「おーい正義お前ここで何サボってやがるんだ」

「ゲッ、生徒指導の紅 無鎖離！」

「俺は紅　武蔵だ。いい加減に名前覚えろ！あとお前は補習だあ！」

「ヘッ捕まつてたまつか！、トウツ」

「窓から飛び降りた・・・？」

正義はバカなので体は丈夫らしい一応

「あのバカ！ここは3階だぞ！はあゝやれやれ・・・」

「バカ兄い大丈夫かな・・・？」

「フィリル？なんか言った？」

「いやっ気にしないで美空1人ごとだから」

「ならいいんだけど」

「じゃあゝなんか色々事件もあつたことでさっさと帰るか、みんな
く起立く

礼くさいならゝ」

「ねえ、フィリルってサトピオンのこと好きなの？ずっと見てたし」

「いや、私好きなのは・・・あ、あに、いやなんでもない、気にしないで」

「ええゝめっちゃきになるじゃん、教えてよゝ誰にもいわないから
さー」

「そういうのじゃないんだ・・・誰にも秘密にしておきたいという
か・・・」

なんといか・・・いつかわかるよ」

「フィリル！あれだよ！あれ！ケーキ屋！名前は・・・？マ　チェ
リエ？」

「違うよ美空　マ　シェリーだよ、フランス語で私の愛しい人だと思
うよ

でもなんでケーキ屋で私の愛しい人なんだろうね」

「そんな些細なことはいいいじゃん！いいいこ」

「美空は勉強の話になると急激に話そらすね」

「いやゝそれほどでもゝ」

「褒めてないからね、むしろ貶してるよ」

「（・・・ω・・・）シヨボーン」

「顔文字みたいな顔するのやめてw皆びっくりしてるよw
それより入ろ」

「そだね」

「いらっしやいませー」

「え!？」

「ノーチェスさんじゃ?」

「よう、ご注文は?」

「えっとこの、チョコバナナケーキで」

「私もそれで」

「かしこまりました、親父ーチョコバナ2個ー」

ドリンクはご自由にお飲みください」

「ありがとう、ノーチェス君」

「お、おう」

ノーチェスはフィリルのことが少し気になっていたのは照れている
のでわかるだろう

フィリルは鈍感なので気づいてないらしい。

「フィーリールー、コーラとオレンジジュース混ぜてみよっか!」

「子供じゃないんだからやめなよ美空、普通に飲んだほうがおいしいよ」

「そだね、じゃあコーラのーもつと」

「チョコバナナケーキ2個お持ちしました」

「うわぁーうまそー」

「これってノーチェス君が作ったの?」

「ああ、俺が作ったのだがまずかったか?」

「いや、おいしいよ、ごちそうさま」

「それはよかった、また来てくれよ」

「うん!」

「フィリールー二股はだめだぞーノーチェスにサトピオンも取るなんて」

「ずるいぞー私にもくれえーその可愛さをー」

「ちょ、やめてよ美空！」

「冗談だよっ」

「じゃあ、そろそろ帰るねノーチェス君」

「あ・・・フィリル！俺のことはノーチェスでいいよ
君つけられると恥ずかしいからな」

「うんっわかったノーチェス」

ノーチェスは脳内でフィリルを好きになっていたのは間違いがない
フィリルはそれも知らずに家へと帰った

「ただいま」

「フィリル、こんな遅くまでどこ行つてたんだ！

もう6時だぞ俺腹減ったぞ・・・」

「自分でカップラーメンぐらい作つてよっ

まったくもうっ、バカ兄いつたら・・・」

そして、フィリル特製の肉じゃがができた

「おお！！！！フィリルが作った肉じゃが！

これで一生生きていけそうだよ、じゃー！いったきまーす！」

「そんなにおいしくないでしょ・・・私が作ったのだから」

「いや、お前以外の肉じゃがなど・・・肉じゃがじゃない！」

「褒めてくれるとうれしいよお兄ちゃん」

正義は必死にこらえていた鼻血を

フィリルの笑顔は世界一だと思う正義は鼻血を抑えるのでぎりぎり
だった。

「ふっ食った食った・・・うまいぞっつてフィリルお前は何も食わ
ないのか？」

「うっ・・・今日はあんま食欲ないし・・・」

「わかったぞ！フィリル！お前太ったんだn（殴
最後までいうまでに壁にめり込まされていた。

フィリルは普段は美少女だが空手や兄のことになると、
すごく強くなるのである。

「バカ兄い！バカバカもうバカ兄いなんてしーらないっ！」

正義は気を失っているのにこれを聞かされて、

正義はもう立ち上がることは不可能かと思っていた。

「バカ兄いったら・・・、ちよつと体重計にでも乗ってみようかな
バカ兄いのせいでちよつと気になったじゃない」

フィリルは恐る恐る乗ってみた

42kgになつていた・・・フィリルは泣きそうになりながら、
風呂からでてきた。

「ん？フィリルどうした？泣きそうな顔して」

「全部バカ兄いのせいなんだからねっ！」

正義は殴られた衝撃が気づいていないのかわからないが
太ったつてことを女に軽はずみでいうものではないと学習はしてい
なかった。

「フィリルはどうして俺に怒ってるんだ？」

フィリルはお気に入りの大きなクマのぬいぐるみを
駄々をこねるように叩いて小声で言っていた。

「お兄ちゃんのバカアバカアバカア、お兄ちゃんなんか、お兄ち
やんなんか

大、大大、大す・・・いや、大っ嫌いなんだからねっ！」

「フィリルのやつ反抗期かな」

そんなことを考えているうちに眠りについていた。

「フィリルおはよ」

「ふんっ」

正義は脱力感たつぷりの溜息をつき、崩れ去っていった。

「フィリルなんで怒ってるんだ？」

「昨日のことおぼえてないの！最低！」

「一応、朝ご飯と弁当は作っておいてあげたから感謝しなさいよ」

「ああ、ありがとう」

「じゃあ、いってきます」

「フィリルまだ怒ってるな・・・一応謝ろう
ってやべ遅刻しそうだ！」

正義はぱっぱと朝飯を食べて学校へ向かった。

「おはよー、フィリル 今日元気がないな？何かあったの？」

「ううん、大丈夫、なんでもないよ」

「そっかならいいんだけどね、それよりあれ見て

サトピー財閥の息子サトピオンじゃない？」

「そうだね、お金持ちはすごいね、あれってリブジンだよ」

「リブ人？」

「リブジンだよすごい高い車だよ」

「やあ、フィリルさんに、美空さんおはよう」

「おはようございます、サトピオン君」

「ははは、サトピオンじゃなくサトでいいよ名前長いでしょ」

「うん、わかったよサト君」

「まあ、君は許そうか」

「フィリルー、あんた誰が好きなのよ？」

「えっ！？、いやそんなんじゃないよあなの・・・」

「私は誰も好きになったりしないよ」

サトピオンと美空は2人ともがっかりしたよう

さつさと教室に向かった。

「ちよつと、まってえよー」

「はあくい席つけ、あいさつ面倒だから省くぞ」

「じゃあ出席確認もだるいから省くぞ」

あとは、なんもすることねーな適当に本でも読んでろー

席はー立っても別にいいぞー」

「ねえ、フィリルさん 空手やってるんだってね」

「はいっ、空手はやってますよ」

「ははは、緊張しなくていいよ、昨日みたいに ね」

「うん・・・ノーチエス」

教室の中はこの会話でざわめいていた。

「あいつら付き合ってるのか？」

「俺のフィリルに手を出すとは！」

「許せん！、フィリルは俺の嫁だぞ！」

「いいや俺の嫁だ」

「フィリルー今日はごめーんー」

「バカ兄い！」

正義は懲りないのであった。

「吹っ飛びなさい！」

「フィリル！俺も黒帯だというのを忘れるな！」

正義は目にあるものが映っていた・・・

それはフィリルのパンツだった。

正義は見とれてそのまま吹っ飛ばされた。

「フィリル・・・パンツ見えてたぞ！（、・ω・）」

「まだ蹴りたいわけだね、お望み通り蹴ってあげる！」

「チヨおま！まて！ぎゃほおおおおー」

「私のハイキックを喰らって起きてた子はいないから！

覚悟しなさい！バカ兄い！」

「俺だって黒帯なんだぜ！俺だってそれなりに鍛えてるんだ！無拍子！」

「え！？」

無拍子というのはノーモーションからスピードを最大限に生かし突きを放つ技である。

フィリルは倒れてはないが意識はもうろうとしていた。

「ははは、これで俺の強さもわかったか？フィリルー」

「あの・・・フィリルは大丈夫なのか？」

「おまえ・・・フィリルの彼氏か！」

そんなに心配して！あって1日だろ！こいつが彼氏か・・・認めんぞ！兄に許可を取ってもらおうか！許さないがな！」

「いや、昨日俺の家のケーキ屋で合ったんですよ。

客として、そこでちょっと喋ったりしてただけですよ。」

「そうか、許してやろう、ケーキを食べたから1kg太ったわけじゃないさそうだしな

フィリルは食べまくったからか」

「バカ兄い・・・なんでそれを知ってるの？理由か遺言を聞こうか」
「なんでって言われても履歴をちょちょいと調べただけさ」

「バカ兄い、今日こそ許さない、一回死んだらどう？」

フィリルがだした技は不動砂塵爆という禁じ手であり
標的を一切揺らさずに内部のみ崩壊させる突きである。

「バカ兄いこれでこりた？」

「それって禁じ手じゃないのか、フィリル」

「いいのよ、ノーチェス、バカ兄いはこれを1000回以上喰らう
てるから」

「そうなんだ・・・すごいね正義さんは」

「くそ・・・フィリル、兄さんは、もう、だめ・か・も・・・」

「おーいそのおめーらーうるせーんだよ」

いいタイミングで下村 零羅が登場してきた

通称だる零羅などと呼ばれている。実際に呼ぶと怒られる
「下村せんせーこの廃棄物を処理していただきたいです。」

「たつくゝ誰だこんなとこに寝てんのはゝこいつか・・・」

懲りないやつだ。生徒指導の紅 武蔵を呼ぼうかなゝ」

正義は紅 武蔵と聞いた瞬間立ち去った。

「じゃあー1時間目はじめるぞーって教科書ねーな・・・」

この中で取ってきてくれるやついるか？」

「私行きますよ」

フィリルは真っ先に手を挙げた。

次に挙げたのは1日で会員が1000名を突破したフィリルファン
クラブの会員と

ノーチェスとサトピオンだった。

「じゃあーフィリルとサトピオンで行ってきてくれよー

場所はどっかだ」

「どっかってどこですか？」

「忘れたんだよー適当に探してきてくれ」

「そうですか」

零羅の雑な対応はサトピオンに幸福の時間を与えることになった。

「サト君って誰か好きな子っているの？」

「い、いきなりどうしたんだ、俺には好きな子なんかいない」

そういうフィリルこそいるんじゃないのか？か、可愛いし・・・」

サトピオンは恥らいながらもフィリルが好きってことを少しアピールしたが

フィリルは気づきもせずに教科書が置いてある教室を探した。

「サト君！あれじゃない？本置いてあるよ」

「あれっばいな」

「サト君そんなにもって大丈夫？」

「平気だよ、女性に重い荷物を持たせるのは紳士として

してはいけないことだよ」

「サト君なんかかつこいい」

サトピオンはこの言葉でちよつと嬉しかったのである。

「サト君、いそご、間に合わないよ」

「大丈夫だよ、1時間目は総合だから授業なんてないよ」

「そうなんだ、キャツ！」

いきなり角から走ってきた男にぶつかって

フィリルはサトピオンのほうに倒れていった。

サトピオンは本をすぐに置きフィリルを抱きかかえたはずみに

フィリルはサトピオンの頬にキスをしていた

「フィ、フィリル？あのかキスはまずいだろ・・・」

「ええ？キャア！サト君のえっちい」

フィリルは照れながら言ったあとサトピオンの体から離れた。

サトピオンとフィリルをつけていたフィリルファンクラブの会員が見ていた

フィリルがサトピオンにキスをしたという情報がすぐに教室内で広まっていることも

知らずに教室へと戻ってきたフィリル達

「おい！サトピオンを捕獲し抹殺せよ！」

「はあ？なんで俺が抹殺されなきゃならんだ？」

「フィリルにキスをさせるなんて！生かしちゃおけん！」

「あれは事故だ！」

「そうだよ！みんな仲良くしようよ・・・ねっ」

全員フィリルの笑顔には勝てないのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6826v/>

名無し小説

2011年10月9日13時50分発行